



揖斐川



セイトカアワダチソウ

揖斐川右岸41Kp（大垣市東町）＝ 平成26年10月26日撮影

『セイトカアワダチソウとススキ』に染まる秋の揖斐川

秋の時期、河川堤防を車で往来すると、揖斐川の河川敷には黄金色に色付いたセイトカアワダチソウ（外来種）とススキ（在来種）が混生している風景を見掛けます。今回、「セイトカアワダチソウ」の生態について紹介します。

■生態の概要と名前由来

- セイトカアワダチソウは、北アメリカ原産の帰化植物で、花期は10～11月頃。1940年代に爆発的に増殖し、本土全域に広まりました。もともとは、日本では切り花用の観賞植物として導入されたと言われていたのですが、蜜源植物として優秀であるため、養蜂業者が積極的に種子を散布したとの話があります。河原や空き地などに群生し、高さは1～4m程度まで生育します。
- 背丈が高いため「セイトカ」で、大型で花のつき方が泡立っているように見えることから、「アワダチソウ」と連想され、「背高泡立草」となったと言われています。

■セイトカアワダチソウは花粉アレルギーの原因？

- 一昔前、セイトカアワダチソウが花粉症の原因と言われ、一騒動があった時期がありました。一部マスコミが取り上げ、机上の学者が認めた為、皆が信じ込んでしまったようですが、フィールド学者が杉の様な風媒花では無く、虫媒花である事を指摘し、騒ぎは収まったとのことです。
- 地下茎に他の植物の生育を阻害する物質があり、他の植物を駆逐しながらはびこっていきます。一時は日本全土を席卷する勢いで繁殖しましたが、逆に、増えすぎて、自分の体内の物質で自家中毒を起こし、一時の勢いは無く、セイトカアワダチソウの勢いが衰えてきた土地にはススキなどの植物が再び勢力を取り戻しつつあります

■日本の侵略的外来種ワースト100に指定

- セイトカアワダチソウは、日本の外来種の中でも特に生態系や人間活動への影響が大きい生物として、外来生物法により、「要注意外来生物※1」に指定されている他、日本生態学会が、「日本の侵略的外来種ワースト100」に指定しています。

※1：既に広く野生化しているが、希少種等との競合・駆逐等との恐れがある地域については、積極的な防除または分布拡大の抑制策が望まれる。（環境省）